

留学への愛ある助言

商学部 教授 榎原研互 えのきまほけんご

あれは大学3年生の秋のことだった。以前からドイツに強い憧れを持っていて私は、ある新聞社の主催する留学試験を受験し、幸運にもその一次試験に合格した。早速そのことをゼミの指導教授に報告しようと、私は小島三郎教授の研究室を訪ねた。しかし、先生の口から発せられた言葉は、まったく予想外のものだった。

「君は一体何しに行くんだい？僕は留学には反対だよ」

先生の言い分はこうだった。「今は国際化の時代だから、たとえ就職してからでも海外へ行くチャンスはいくらでもある。はっきりした目的意識も持たずに、漠然とした憧れだけで行っても時間を浪費するだけだ。まずは自分の進むべき道をしつかりと見据え、その上で今何をすべきか考えた方がよいのではないか」

当時は今日のように帰国後の単位認定などの制度が整っておらず、1年留学するのに2年間休学しなければならない時代であった。そのことを先生は案じてくれたのだろう。ただ最後には、「せっかくなここまで来たのだから、二次試験も頑張りなさい」と優しく励ましてくださった。

私は話を聞きながら、先生のおっしゃることはもともとだと思い、自分の考えの甘さを恥じるとともに、ひとりの学生の将来をこれほどまでに真剣に考えてくださった先生の愛情の深さに心を打たれた。二次試験は私の力不足から見事に落ちてしまったが、「自分の将来をよく考えなさい」という先生の言葉が、結果として私に大学院への進学を決意させた。今から30年以上も前の話である。

その後教員となってから、私は二度の留学の機会を得た。それこそ先生の言われたとおり、おそらく学生時代の留学では経験し得なかったであろう充実した研究生活を送ることができて、先生には心から感謝した。

先生が亡くなられてしばらくたったある日のゼミのOB会で、ひとりの先輩がこう言った。「ここにいる一人ひとりが、実は自分こそ先生からいちばん愛されていたと思ってるのではないか」。その言葉に、その場にいた誰もが深くうなずいた。

あのような教師には、なるうと思ってもなかなかなるものではない。



ゼミの同期と
恩師を囲んで

談話室

教員によるエッセイコーナー